

○吉田耕起・岩本英伸・木場達美¹⁾
 (熊本農研せい業・¹⁾ 芦北地域振興局)

【目的】

トマト黄化葉巻病の対策としては、トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)を媒介するタバココナジラミ(バイオタイプBおよびQ)のハウス内侵入を防ぐことが最も重要である。しかし、熊本県の抑制栽培では、高温障害回避のため、8月下旬の定植からビニルを被覆する10月中旬まで、露地あるいは4mm目合いの防風ネットを被覆した状態で経過することが多く、トマト黄化葉巻病が甚大な被害をもたらしている。そこで本報では、定植から天井ビニル被覆までの期間ハウス全体を防虫ネットで被覆するオールネット栽培が、媒介虫の侵入およびトマト黄化葉巻病の発病に及ぼす影響を検討した。

【材料および方法】

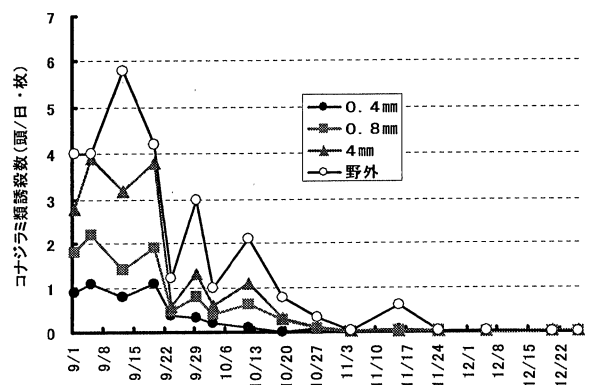
熊本農研センターい業研究所内のビニルハウス(間口8m×長さ25m×高さ3.4m、南北向き)3棟を供試した。天井部の防虫網の目合いを0.4mm(ポリプロピレン素材、以下PP)、0.8mm(ポリエステル素材、以下PE)とし、対照区は4.0mm(PE)目合いの防風ネットを被覆した。各区とも施設側面は1.6mの高さまで目合い0.4mm(PP)防虫網を被覆した。穂木「ハウス桃太郎」、台木「がんばる根」を2005年7月11日に播種した。施設側面を目合い0.4mm(PE)と0.6mm(PE)の防虫ネットで二重被覆したガラスハウスで育苗して8月24日に定植した。ハウス内には、黄色粘着板(257mm×100mm)を育苗期では30cmの高さに㎡当り6枚設置し、定植後は畝中央100cmの高さに1棟当り40枚設置した。殺虫剤は苗鉢上げ時と定植時に2回粒剤処理し、また薬剤を育苗期2回、定植以降7回の計9回散布した。媒介虫は100mm×100mmの黄色粘着板を100cmの高さにハウス両サイドと中央の北側、中央、南側の各1枚の計9枚設置し、誘殺されたコナジラミ類の数を調査した。また、ハウスの間にも3枚を同様に設置し、野外の誘殺数を調査した。発病調査は0.4mm区と0.8mm区では各230株、対照区では120株について、新葉部に病徴が現れた株を発病株として摘心時まで行った。発病株はただちに抜き取った。

【結果および考察】

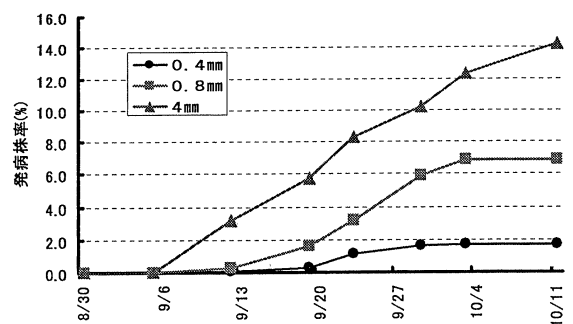
施設内のコナジラミ類誘殺数は、露地の誘殺数に応じて変化し、8月下旬から9月中旬が多く、その後はしだいに減少し、11月以降は誘殺されなかった。誘殺数は対照区に比べオールネット区で少なく、誘殺数の合計は0.4mm区が対照区の27.8%、0.8mm区が55.7%と目合いが小さいほど誘殺数は少なかった(第1図)。

発病は、いずれの区も9月中旬に確認され始め、摘心した10月中旬まで増加した。最終的な発病株率は、対照区が14.2%であったのに対し0.4mm区が1.7%、0.8mm区が6.9%だった(第2図)。

以上の結果より、オールネット栽培の媒介虫侵入抑制効果および黄化葉巻病発病抑制効果は高く、栽培中目立った高温障害も観察されなかったことから、黄化葉巻病対策として有効であると考えられる。また、その効果は目合いが小さいほど高い。



第1図 コナジラミ類誘殺数の推移



第2図 黄化葉巻病発病株率の推移